
禁書にM T Gが混ざりました。

餡子入りパスタライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

禁書にMTGが混ざりました。

【Nコード】

N4740U

【作者名】

餡子入りパスタライス

【あらすじ】

よくある転生もの。だけど良く分からない。転生している間の話も前世の自分のことを忘れてしまった。だけど知識はある。転生したということだけは分かる。そんな小学生、白井遠夜しろいひのちやが織り成すハートフルな話になれば良いな……。能力は《ブレインズウォーカー》MTGです。

第一（前書き）

MTG好きが爆発した。

第一

僕の名前は白井遠夜しろいとおやといいます。現在9歳で、小学校に通っています。よくあるssの転生というやつで、苗字を見ての通りあの人と関わりがあります。

もちろん能力とかはありますが、それは後々で……。

最初に来たときはびっくりしましたが、今では平穩に日常をエンジョイしてます。ハイ。

白井黒子お姉ちゃんしろいこくろこは本当に親切でいい人です。肉親だからというものもあると思うのですが、とても僕を可愛がってくれます。でも、ですの口調は辞めたほうがいいと思います。ハイ。

でも、そんなお姉ちゃんが僕は大好きです

お姉ちゃんそろそろ中学を迎えるみたいで、もう学校では会えないと思うと寂しくなります。

黒子お姉ちゃんは風紀委員ジャッジメンでも優秀なエリートで、LEVEL3の強能力者《空間移動》(レポート)この歳でこの能力は凄いと開発者の人も言っていました。なんだかとても嬉しいです。

かという僕は……。

現在能力測定を行っています。

能力測定結果。

《ブーフズてくあか》

なんか文字化けしました……。

それを見た先生は頭の上にクエンスチョンマークをつけた状態で一時停止してしまいました。

「先生これはどうすればいいんですか？」

「ちょっと先生達と話してくるわね……」

そういうと先生は僕の能力測定データを情報端末に入れてどこか行ってしまいました。

途方にくれる僕でしたが、仕方なく一旦教室に戻ることにしました。

「なあなあ、能力測定の結果どうだった？ オレは凄いで！なんと驚くことにレベル1の《発火能力》だ！」

教室に戻ると僕の友達の淳司君^{あつし}が得意げに手から火を出していた。僕はニコニコと笑って「すごいね」というと、淳司君は「これならレベル5も夢じゃない！」とクラス全員に見せびらかしに行った。といってもその発火能力はまだ未熟なせいもあって、マッチ棒よりも火が小さく息を吹きかえればすぐに消えそうとい表現が合うほど小さかった。

確かに淳司君は凄い。能力測定後すぐに《発火能力》を使えるようになるのは確かに才能があるのかもしれない。レベル5は無理でも

で、皆さんとはお別れです。悔いの残らないようにしてくださいね
！」

「「「「「「「「「「「「「「「「」

「あれ皆どうしたの……？ 白井君……？」

「こんなのってないよ……」

「え……？」

「なんでもありません……」

一瞬頭が真っ白になった。

レベル5……さらに《アクセラレータ一方通行》を超えて第一位。

嫌だ嫌だ嫌だよ……。。

これ以上身体を弄いられるのはイヤだ。

また研究所に送り返されるなんてイヤだ。

友達と離れ離れになるのがもつとイヤだ。

なにより、お姉ちゃんと別れるなんてもつと嫌だよ……。。

「こんなの嫌だよ……。。」

皆が何も言わないのは僕が涙を流しているからだろっ。

「お姉ちゃん助けてよ……」

僕の知識にはしっかりとあった。ブレインズウォーカー《次元歩行》

かの有名なカードゲーム《MTG》に存在する最強存在の一つ。神とも崇められるほどの絶対強者。

だから分かる……この能力は世界をも壊せると。

この世界にいる天使なんて無意味だ。

第二

レベル5の第一位と言われて一瞬困惑したが、同時にこれも仕方ないものだと思ってしまうた。

前世の頃の自分のことは分からないが、知識などは頭に入っている。その中でも特に印象深かったのは《MTG》ことについてだった。何故か分からないけど、とても心に残っている。記憶とか知識云々（うんぬん）とは違う場所……《魂》から閉まっている気がしなくもない。

アレから一時間後に、レベル5ということで白衣を着た研究者さん達が僕のことについて語り始めた。

《存在そのものがレベル5》

《測定不能の最強存在》

《垣根提督かきねていとくや削板軍霸そぎいたぐんはを超える原石》

などなど僕がいかに凄いかを語ってくれた。

「それでなんだが……ぜひともその能力を私達に研究されて貰えないだろうか？」

「い……………や」

「ん？ なんだね聞こえなかったもつ一度言ってもらえないか？」

「嫌……ですう……」

「…チツ……どうしてかね…？ もしかして君の能力は人を救えるかもしれない。この学園都市にも更なる発展に貢献することが出来るかもしれないのだぞ！？」

「それでも……です……」

「なら聞くが測定直後レベル5という能力を君は制御しきれるかね！ 制御も調整も何もしていない君が抑えられるのか私は不安だ。暴れ始めたらこの学園都市にどれだけの災害を撒き散らせるのか予想だにしない……。君はまだ9歳だ肉体的にも精神的にもまだまだ幼い。だから私達が能力を完璧に扱えるように手取り足取り教えて上げたいんだ」

「……じゃ、毎日お姉ちゃんに会えますか？」

「残念ながらそれは約束できるかどうか私には分からない。が、出来るだけ私のほうから合わせてもらえるよう上司に頼む」

「研究所ってどんな所ですか？」

「！！ 興味を持ってくれたのかね！？」

「実は少し興味があります」

「そうかそうかそうかね！」

そういうと白衣の人は意気揚々と答えてくれました。

かの第一位《アフセラレータ一方通行》もそこで能力開発がされていたそうで、機材、人材、資材などは他の研究所とは比較にならないほどの充実しているそうです。

なので危険などなく、僕の能力を開花開発することが出来るようになるということです。

「で、どうだね！ 私と共に【絶対能力進化】（レベル6）を目指してみたいか！」

白衣の人はまるで鬼にも迫るの形相でした。

目は充血していましたし、鼻息も荒い。説明するたびに狂気にも近い何かを感じました。

その形相にどこか僕は怖くなってきました。

「……………う……………あう」

そのせいか涙が出てきました。

僕は前世の知識はあるものの前世の記憶がないせいか、肉体年齢も精神年齢も統一されています。

僕は白衣の人と話している最中に大泣きをしてしまったので、その日は自宅送還となり、白衣の人は黒服を着た人にどこか連れていかれました。

「いい返事を期待してるぞ白井遠夜君！！ ちよつと君ら僕をもっと丁寧に扱え！ 肘がぶつかって痛いだろうが！」

そう最後に白衣の人は言っていました。

なお自宅送還された理由は、情緒不安定じょうしよふあんていのレベル5をこのまま放置することは出来ないそうなので一度自宅に帰すそうです。

校庭には真っ黒なリムジンが待機していて、ガクガクと震えました。

どうも、前世の影響か黒いリムジン＝誘拐車という法則が頭で出来ていたので、もしかして僕を誘拐！！ などど考えてしまいました。

中からはガツチリと引き締まった黒服の人が出てきたので、涙目になってしまいました。が事情は察しているので大人しく車に乗りました。

自宅に帰ると誰もいませんでした。母さんも父さんも共同で働いているので、こんな真昼にはいないとは思っていました。黒子お姉ちゃんもまだ学校ですし、きつと放課後あたり風紀委員ジャッジメントの仕事もあると思うので今日も帰りが遅いと思います。僕も風紀委員ジャッジメントに入りたいと思ったのですが、年齢規制に引っかけ残りながら無理でした。その事実が気がつきションボリしていた僕を黒子お姉ちゃんは「もう少し成長したら一緒にがんばりましょうね」と言い僕の頭を撫でくれました。

先生からは今日中に転入届けが自宅に来ると言われたので、試しに確認してみると有りました。

アレからまだ二時間も経っていないのに……仕事が速い……。

自宅に鞆を置き、ちょっと気晴らしに外に散歩することにしました。

僕はちよつと能力の確認をしようと思晴らしもよく、人気がない場所に移動しました。

そこは見覚えある吊り橋でした。

僕は頭の中に大きな図書館をイメージしその中から一つ本を取り、読み上げるイメージをしました。

始めての能力なのに何故ここまで理解できるのかは僕にも良く分かりませんでした。前世の知識にあるMTGの【ライブラリー】(書庫)から【ドロウ】(引き出す)をイメージした結果こうなりました。

そうして僕は書庫から引き出した知識の内の一つ。呪文を強くイメージしました。向ける先は吊り橋の上から見える海の更に向こう……誰も居ないのを確信して言葉を紡ぐ。

「《稲妻》」

MTGでは1マナ3点火力。それが現実でおきたらどれだけ凄いのだろうと少し期待していた。

空から真つ赤な雷が海へと落ちた。轟音と共に海が大きく波打つ。飛散した海水がこつちまで飛んできて少し服が濡れました。

その光景に僕は啞然となりました。

まさかここまで威力があるとは思いませんでした……。

僕はあまり、研究者というを信じない。理由は簡単……《怖い》か

からです。

どんな理由を並べても、どんな理屈をこねても、それで人が傷ついていい理由にはならない。

僕の能力はかなり異常というのは他の能力と照らし合わせても良く分かる。一番近い能力といえば《ダークマター未元物質》ぐらいだと思う。

怖いのは興味本位で身体を弄くられるのが怖いから、もう二度とあんなことにはなりたくない。

「原作ブレイク………?」

ただ僕はそう呟いた。

遙か宇宙その光景を記録していた宇宙衛星があった。宇宙衛星といつても本来の用途は違うその名も樹形図の設計者（ツリーダイアグラム）

その瞬間学園都市にレベル5に相応しい超能力者が一人また増えた。万能の力を持ち神にもなれる存在……レベル6（神の答えを知るもの）に近い存在が生まれた瞬間でもある。

第二（後書き）

《稻妻》（赤）

インスタント

クリーチャー1体かプレイヤー1人を対象とする。稲妻はそれに3点のダメージを与える。

第三（前書き）

天井の性格があ……わからない

第三

とある研究所にて。

「新しいレベル5が現れたみたいね……それも《一方通行》アクセラレーター おも凌ぐ第一位とは。まさに鬼才ね。どうするの天井？ このままでは《絶対能力進化（レベル6シフト）》にも影響は出るかもしれないわよ？」

そこには白衣を着た二十前半の女性と、癖っ毛のある男が居た。

「問題ないだろう。樹形図の設計者の計算では20000通りの戦闘環境で《妹達》シスターズを20000回殺害することによって《一方通行》アクセラレーターは《絶対能力者（レベル6）》へ進化することには変わりない。多少イレギュラー問題が発生したところでなんだというのだ？ 計画はこのまま続行する」

能力測定されてからまだ数時間も経っていないのに、もう情報がこの者達に回っているのは普通は可笑しい。

だがここは学園都市であり、科学が最も優れた場所でもある。

情報伝達の早さも世界一位のようで、このような情報はすぐ研究者達に公開されるようになってきているようだ。

ただ一部を除く。

「それにしても《次元歩行》ブレインズウォーカーって何かしら？ 聞いたこともない能力だけど……」

女性はパソコンのキーボードを叩きつつ、その能力者のプロフィールを見る。

「ブレインズウォーカー《次元歩行》未だデータバンクにも載っていた新しい能力に、女性は興味が湧くが、写真と年齢を見るのと同時に苦虫を噛み潰すような表情になった。

「計測器では能力測定不可能の《原石》みたいだが、能力そのものは良く分からないようだ。そもそも測定数値がバクを起すこと自体普通はないのだ……もしかして、そのような能力なのかもしれないがね……」

「それにしてもこれは異常でしょ？ この子まだ小学生よ？」

「レベル5の人間なんてそんなものさ。《アクセラレーター一步通行》もだいたい同じぐらいの歳でレベル5だ。別にその子だけが特別なわけではない。ただ能力には多少なりとも興味があるな……」

「名前からして……《レポート空間移動》系の能力かしら？ この子の姉の能力が《レポート空間移動》だし……可能性はあるわね」

「ふむ、そろそろ公開されるようだぞ芳川。新たなレベル5が」

やはりと天井は思った。

今回はどうも、ある教師が情報を大ぴらに公開してしまったようで、これ以上の情報流出は防げないようだ。

そのせいか秘密裏にしようとした計画が駄目となってしまったそう

だ。

本来ならば、暗部なりどこかの研究所でモルモットにされたりするのだろうが、情報が広がりすぎたようで、そのようなことを強制させたりなど出来なくなってしまうたようだ。

「あなた何気に興味津津なのね……」

「当たり前だ。仮にだが《アフセラレーター一步通行》の《絶対能力進化（レベル6シフト）》を止められる者がいるとするならこの少年だけだからな、警戒するに決まってるだろ」

このままだと確実に白井遠夜しろいとおやは光の住人となるだろう。ならば《絶対能力進化（レベル6シフト）》を知ることもなく過こすことになる。

立ち位置としてはあのレベル5の第3位……いや、今では第4位の超電磁砲レベルガンと同じ客寄せパンダになるだろう。

しかし、万が一にも知られてしまった場合……どうなってしまふのかは分からない。

一般人に知られないように気をつけてはいるが、それは絶対ではない。

まあ、知られたとしてもたかが9歳の小学生だ。

能力がレベル5だとしても精神も肉体も未成熟、大したことは出来ないと思う。

気にし過ぎなのではと思う天井であった。

「……まあそうね」

それに同意する芳川。

「せめてこの子には、何も知らず幸せに過ごしてもらいたいものね……」

「それはこの子次第だろ……」

学園都市の闇は深く広い。

一生関わらず過ごしていくのは難しいことではないかもしれない。

それは普通ならばではの話だ。

しかし、白井遠夜は残念ながら学園都市の第一位である。

そんな存在を見す見す科学者達が放っておく筈がない。

だから、彼らは考える。どうやって少年を同意までもってくるかを……。

彼らは知らない……フレインスウォーカー《次元歩行》という存在がどんなものであるか……。

小ネタ1 (前書き)

よくある小ネタ気に入らないヒトも居ると思いますが、許してください。

小ネタ1

『電気は大切にね!』

それは偶然だった。たまたまテレビをつけてみると、黒子お姉ちゃんの憧れでもあり学園都市第四位の超能力者『御坂美琴』さんが、何故

か分からないが東京電力ならね学園電力のCMに出ていたのだから驚いた。

「お姉さま〜!! なんとかわわ…凛々しいでしょ! 黒子は黒子はどうかになってしまいそうですの!」

と、黒子お姉ちゃんは叫びながら机に向かいドラムヘッドをします。本当は『可愛いらしい』と言いたかったのですが、寸前で言

い直しました。

何故だろう?…?

「こっつしてはおりませんの! 早く録画しませんと!」

黒子お姉ちゃんは御坂さんのことになると目の色が変わります。

黒子お姉ちゃんと御坂さんの一ヶ月記念日に僕から黒子お姉ちゃんに御坂さんの『クローン』をプレゼントしたら歡喜狂乱しながら『クロ

ーン』に抱き着き、ペロペロと唾液塗れになるまで舐め続けていました。

それを見た僕は、お姉ちゃんの豹変に部屋の片隅でガタガタブルブルと怯え、体育座りをしながら目を伏せてました。

その後、御坂さんが寮に帰ってきました。早々黒子お姉ちゃんを見つけると、頬を引き攣らせながら黒子お姉ちゃんに電撃を浴びさせました。

プスプスと音を発て、黒子お姉ちゃんはその場に倒れ伏してしまいました。

その光景を見た僕は、すぐさま黒子お姉ちゃんに駆け寄った。

御坂さんはしつかりと手加減を心掛けているのか、相手を身動き出さない程度に電力を調整することなんて朝飯前のようにです。

でも、それとこれは別です……。

大切なお姉ちゃんに危害を加えられて黙っていられる程、僕は聖人君子ではない。

「これ以上お姉ちゃんに酷いことしないで」

そう僕が黒子お姉ちゃんを庇うと、そつと頭に手を置かれました。

「ふふふっ……随分立派になりましたわね……最初の頃と比べて見
違えりましたわよ遠夜。殿方はそれぐらい度胸がないといけませの
よ……」

……」

その言葉はとても心に響きました。

最初と比べて僕はどんな風に変わりましたか？

黒子お姉ちゃん……？

「お姉ちゃん……」

「うわぁ……なんだろこの空気。まるで私が悪かったみたいじゃな
いの……」

「ああ……！この肌この臭いこの感触！全くお姉様と同じですの！」

「見てるこっちは、恥ずかし半分怒り半分でなんともコメントしづ
らいけど……完成度高いわね、これ」

「ふふふ……それわね……本物と全く同じ」成り代われる」ぐらい

の存在だからこれぐらい出来ちゃうんだよ!? ふふん！ それにね。

この御坂クローンはちゃんとした生物だから生き(・)(て)(・)(る(・)(んだよ」

「え!? 嘘」ピタッ

「脈が通ってる〜!!」

驚くのも無理はありません。実は僕も凄く驚いています。

『クローン』の特性はなんとなく分かっていたましたが、ここまで本体と同じ風に出れるとは思いませんでした。

「黒子お姉ちゃん僕からのプレゼント大事にしてね」

これは本心から、黒子お姉ちゃんに言いたいことです。

黒子お姉ちゃんの御坂さん好きは分かっていましたし、記念になるものを考えていたらこれが候補に挙がりました。

最初はアーテファクトなんかを渡そうと考えていたのですが、そこまで女の人が好きようなものが見つからなかったので断念しました。

だからこそ『クローン』です。

あれなら当りはあっても外れはないかなあ〜と思い即行動。

目先に居た御坂さんをコピーさせてもらいました。犯罪な気がしま

すが気のせいですよね？

「え、え！！ 凄い！！ まるで私と瓜二つじゃない！！ ねえねえこの子他に何かできることとこあるの！？」

御坂さんが凄い食い付きを見せました。

自分とまったく同じ容姿をした人が居たら、普通は不気味がるのに御坂さんは本当に不思議な人です。

それからあだこうだと話が進み、何故か『クローン』の性能テストをするはめになりました。

まず、第1しゃべれる。

「おはようございますご主人様」

御坂さんの顔がまた引き攣っている。

自分と同じ顔でこの言動は違和感バリバリなんだと思う。

それとぼくに対してご主人様と言っているのも問題なんだと思う。

黒子お姉ちゃんはなんとも言えない表情をしている。

「（お姉様＞黒子＞遠夜＞お姉様似のクローン）……やらないか」

何言っただこの人は……。

でも、そんな黒子お姉ちゃんが好きです。

第二。『^{レベルガン}超電磁砲』と同等のスペック

ムニユムニユ。

「この手触り……！ 間違いなくお姉様と同じ……！」

「ちえいさー！！！」

御坂さんの鋭い蹴りが炸裂。蹴り飛ばされた黒子お姉ちゃんは見事に宙を舞い綺麗に頭から壁にぶっかった。

どう考えても致命傷であるが、お姉ちゃんの頑丈さは日に日に増しつつづけている。大丈夫と分かっているが、それはそれ、これはこれ、心

配であるのに変わりありません。

僕はお姉ちゃんの頬に手を当て、『治癒の軟膏』を使用。すると一瞬にしてお姉ちゃんの傷という傷が治りはじめた。

っていつかテカリ始めました。さすが3点のライフ回復。致命傷ですら治せるレベルは凄まじい。

「ありがとうございますの遠夜」

「毎度毎度思っけど、その能力って万能性高いわよね……むしろ出れないことってなにかあるのかしら？」

ニヤニヤと笑いながら御坂さんが何か言ってきました。むう……挑

発されているような気がします……別にそれ自体はあまり気になりま

せんし、これは御坂さんのよくある行動の一つなので、むしろほのぼのします。

「僕の出来ないことですか？……………さあ……………」

「えっ？」

MTGのカード能力を全部使えるブレインズウォーカーですから、出来ないこと？ むしろこっちが聞きたいです。

『時間制御』にしたって『死者蘇生』にしたって。そんなのブレインズウォーカーの常識の範囲ですし、人のいう禁忌に当て嵌

まる行為ですら、ブレインズウォーカーの出来る範囲内。

この世界最強の天使も、少し工夫すれば倒せますし、僕には精神操作系の能力も魔術も反射させて貰ってるので、操られて死亡なんてこと

もありません。

我ながらバランスブレイカーだと思います。

ん？ 天使の大群？ 《神の怒り》ってね

「ん…………じゃさあ、ゲコ太ストラップとかこう手からパッ！って出せる？」

……予想外だった……。

まさか、手品師のような芸を要求してくるとは思っていませんでした。

「え、え、え？ ……ごめんなさい……ちょっと分かんないです……でもちよつと待っていてください」

物質精製の呪文なんてあつたっけな……。

意外にも難しいぞこの難問……もしかして案外応用性ないのかもしれないこの能力。

実物があるならあるいは複製出来たかもしれないけど、今の状態では出来ないとしかいえません。

不甲斐ない……。

さつきから目を光らせて期待している御坂さんに申し訳ない気持ちでいっぱいです。

ウルザさんなら出来そうな気がします……。

アーティファクト職人ですし……。

僕に出来るのはあくまで真似事。

それを改めて実感しました。

「う、う……グスン……。ごめんなさいできません……」

罪悪感で本当に泣けてきました。

「仕方ないわよ。誰も得意不得意あるし、気にすることないわよ」
よしよしよし。と頭を撫でてくれるのは嬉しいのですが、恥ずかしいです。

「あまり……子供扱いしないでください……」

そっばを向いて、視線を落としました。

「そんなにむくれちゃって……黒子の時はあんなにデレデレしてるくせに」

「……………」(プイッ)

「(可愛いなちくしょ……………」

「そう言えばさっきから黒子お姉ちゃんが静かですが……………」

視線を向けた先には、クローン御坂と黒子お姉ちゃんが居た。

「あばばば！…まるでお姉様を間近に感じてるようですの〜！
「！

黒子お姉ちゃんがクローン御坂に何をしたかは不明だが、黒子お姉ちゃんが電撃で感電していることだけは分かった。

「黒子お姉ちゃん……！」

「だってだって仕方ありませんでしたの……！ 凜とした姿で今か今かと待ち構えているように見えるお姉様……これは飛びつくしかない」と

わたくしは確信し、本能に従った行動をとったまですの……！」

「なるほど分かりました……誘ってんじゃありませんよ御坂クローン」

「申し訳ございません……！」

「どう見ても、非は黒子にあると思うんだけど」

うん。僕もそう思います。

でも、僕に超偉大な黒子お姉ちゃんを非難することはできないのです。

「さっきの電撃ほとんど無駄がなかったわね。まさか、能力者としてのレベルも5だったりして」

「え？ そろそろですけど？」

「えっ？」

「えっ？」

第三。『レールガン超電磁砲』と同等のスペック（戦闘能力&演算能力）

「なんなら私が相手になってあげるわよ」

「ですよね……」。

「いける？」

念のため御坂クローンに確認を取ります。

「勿論です」

自信満々に返してきましたが本当に大丈夫なんでしょうか？

「お待ちください！」

激突！御坂VS御坂クローンの戦闘にストップをかけたのは黒子お姉ちゃんだった。

「なによ黒子」

「何故お二人が争わなければならないのでしょうか……そんな戦闘能力とか別に無くてもいいじゃないですか」

全くです（、・・・）キリッ

「私はね戦ってみたいのよ。自分のクローンがどれだけ力を秘めているか、自分の目で確かめてみたいの……それに面白そうじゃない」

「はあ……そこまで言うなら黒子はもう止めません。ですがお姉様、ご自重はしてくださいまし」

「……それぐらい分かってるわよ」

「言いたいことは色々ありますが、どうかお怪我のないようお願いいたしますの」

御坂VSクローン御坂の戦いは、30分以上の死闘を得てようやく終了しました。

御坂さんが電撃を使えば、クローン御坂も電撃を出して相殺し、御

坂さんは砂鉄を使って攻撃するも、御坂クローンも同じ砂鉄を使い受け

止めたりして中々決着がつきませんでした。

力量も経験もパターンも同じなので、中々終わらないのも当然です。

最後はレールガンを両者共使い、レールガンのぶつかり合いがあったが、コインが摩擦力に耐えられなかったのかぶつかり合った瞬間両方

共コインが蒸発しました。

「もう、駄目……電池切れ」

「私も同じく……」

能力行使により疲れ果てたのか、二人共その場に座り込んでしまいました。

「なんだか変な感じよね……」

「？」

「自分と同じ能力自分と同じ顔。勝負には負けたのになんだか清々しいいわね……」

それはきつと自分の力を持つクローンに負けたからでしょう。

私ってこんなにやれるんじゃない!!! って感じでしょう。自己満

足ですね分かります。

「御坂さん負けてはいません。引き分けです」

「今の自分を上回れなかったというので、私の負けよ」

「そう、下げずむことはないと思いますよ。そんな簡単に強くなったら誰も苦勞しません。それは御坂さんが一番分かっているんじゃないん

ですか？」

「確かにそうね……そうだったわね。自分のクローンに言われるなんて思わなかった」

「立てる？」

そう御坂さんは手を差し出す。

「ありがとうございます。御坂さん」

「もう、御坂でいいわよ。私達友達でしょ」

「ありがとうございます御坂」

……………もの凄く青春します。

「うへへ……」

不気味な笑い声が聞こえました。声のする方を向くとお姉ちゃんの

顔が凄く弛んでいるのが見えました。

……素敵な声です黒子お姉ちゃん……。

お姉ちゃんが、にやけている理由はなんとなく分かります。

あの戦闘の結果、一部の服が焼け焦げて炭化し、崩れ、肌の露出具合が前よりも増しています。

別に外に出られないレベルではありませんから何も言いません。

そして、黒子お姉ちゃんが喜んでいるので、僕からは何も言わない。

御坂クローンは御坂さんと仲良くなったし、このまま還すのも可哀相です。ちょっと様子見してから還すか還さないか考えましょう。

別に維持コストが掛かるわけじゃありませんし、僕に特に影響ありません。なにより黒子お姉ちゃんが嬉しそうなら僕はそれで良いのです。

。

「じゃ帰りましょ」

のち御坂クローンは御坂のハッキングにより、戸籍を作成し常盤台に入学。

さすがレベル5やるのが違う……。

後、さすがに御坂クローンという名は問題なので御坂さんに改名された。

『御坂ミク』

御坂クローンだからミクだそうです。

システムスキャンの結果はなんとレベル5の第5位となり世間を震撼された。

「ジャツジメントです！」

何気にジャツジメント風紀委員に入っていました。

いつも本部でゴロゴロしてる僕と違って働き者で……フフフフッ……。

……年齢制限って嫌になります。

第一位の特権で改正しようとしたら黒子お姉ちゃん怒られました…

…。鬱だ死ねる…。

御坂は《絶対能力者（レベル6）》の存在を知り一方通行に立ち向かう。

一方通行の反射になす術もなく負けてしまった御坂。

思ってもいなかった……死ぬ気で特攻すれば精々倒せなくても、妹達を救える。そう信じて己の力を振るった御坂であったが、第2位と第

4位には絶対的な壁があることを思い知らされた。

電撃を撃つても砂鉄で切りつけても無傷、無傷、無傷。まるで最初から相手にされていなかった。

一方通行は妹達の内の一入、まだ名前は知らないが、その子は戦闘中の疲労もあり足元がふらついていたのだろう、一方通行から距離を取

ろうと足を動かしたのが切っ掛けなのか地面に躓いてしまった。

「お姉さま逃げてください……とミサカはお姉さまに懇願します」

御坂にまるで懇願するような目で見た。

見す見す人が死ぬような所をはいそうですか、つと言えるほど御坂は冷酷ではない。

だから、妹達は懇願したのだ。自分の命はどうでもいいから、お姉

さまの命は助けてあげたい。

もとからこの計画は妹達の殺害が目的である。だから、このことを忘れてこの場から立ち去れば一步通行は必要以上に追ってはこないし、

御坂の命の保障もされる。

御坂もそんなことは分かっていた。でも、ここで逃げてしまえば確実に後悔する。きつと一生後悔する。そんなのは嫌だ。

この子達がなんでこんなやつのおい物にされなければいけないんだ！

「お断りよ！」

そう御坂は言うと一步通行に向かってレールガンを叩き込む。レールガンとは元々軍事用に使用されることが多い。

レールガンは電気伝導体のレール間に、電流を通す電気伝導体を弾体としてはさみ、この弾体上の電流とレールの電流に発生する磁場

の相互作用によって、弾体を加速して発射する物である。

御坂の場合、レールは磁場で構成。弾体はコインを使用。

その威力は凄まじいほどで、厚さ20cmの鉄片は余裕で貫通する。

人に撃てば確実に死が訪れる。打ち出した本人が意識しているかは分からないが、切り札は最後まで取っておくというやつなのだろう。

御坂が撃ちだしたレールガンは確かに一步通行に直撃したが、一步通行には傷一つ付いていない。

「ああ？ さっきからブンブンとつつせんだよオリジナル」

それだけ言つと一步通行は妹達へ歩み寄る。

御坂は自信喪失していた。自分撃てる全力を出し切ったにも関わらず、一步通行が顔一つ変えなかった。

つまるところ、最初から目に入ってなかったということだ。

動けない……。助けてあげたくても私ではどうしてもあげられない。

御坂は酷く絶望していた。

私じゃ……。この子達を助けて上げられない！！

コロコロコロ……。っと妹達から何かが転がった。

それは、御坂がプレゼントしたガチャガチャの景品だった。

ゲコ太が印刷された缶バッチだった。

『お姉さまから頂いた初めてのプレゼントですから』

妹達はすぐさま立ち上がると、缶バッチに向かって走り出し。それをどこか大事そうに胸元に抱えた。

そう、それは紛れもなく羽であった。雪のようにしんと、降り注ぐそれは天使の羽みたいに綺麗で、空に移る光景は幻想的だった。御

坂は意識が吸い込まれるのを感じる。同時に……

「一人で何もかも抱え込まないでください御坂」

聞いたことのある声、それも良く聞く声。御坂の振り向いた先には白羽を生やしたミクの姿があった。さらにその腕にはどこか安らかならな

に寝ている妹達の姿がある。

「よかった…よかったよお……！」

涙が溢れる。妹達の姿がもう一度見られる。それを思うと涙が止まらな

「はア？ なんなんですかア、部外者がこんなに多いとか、ふざけてるんですかア」

一步通行は完全に白けたのか、研究場に戻ろうとする。本来なら短気である筈の彼がここまで何も起こさないのは変であるが、なんだがB

映画を見せられたようなこの状況にテンションはただ下がりであった。

「ちょっと待ってください」

「ああ？」

「とりあえず、つべこべ言わず戦ってください」

「はア……？」

一步通行は一瞬理解できなかった。

「私の姉と妹達をよくもここまでボロボロにしましたね。だから今度は私達が貴方……一步通行をボロボロにします」

「はア！！ よく見りゃア オマエも超電磁砲のクローンか！ アレですか……敵討ちってやつですかア。『妹達がお世話になりました』」

「ってか！ くだらねえなオイ。そんなに死にたきゃ愉快的スクラップにしてやるよオ！！！」

省略

天使化したミク（御坂クローン）により、一方通行を撃退し、妹達を救出。レベル6シフト計画は凍結となった。

小ネタ1 (後書き)

疲れた。

Healing Salve / 治癒の軟膏 (白)
インスタント

以下の2つから1つを選ぶ。「プレイヤー1人を対象とする。そのプレイヤーは、3点のライフを得る。」「クリーチャー1体かプレイヤー1人を対象とする。このターン、それに与えられる次のダメージを3点軽減する。」

Clone / クローン (3) (青)
クリーチャー? 多相の戦士 (Shapeshifter)
あなたは、クローンが戦場に出ているいずれかのクリーチャーのコピーとして戦場に出ることを選んでもよい。

0 / 0

Wrath of God / 神の怒り (2) (白) (白)
ソーサリー
すべてのクリーチャーを破壊する。それらは再生できない。

天使の運命 / Angelic Destiny (2) (白) (白)
白)

エンチャント? オーラ (Aura) M12, 神話レア

エンチャント（クリーチャー）
エンチャントされているクリーチャーは+4/+4の修整を受ける
とともに飛行と先制攻撃を持ち、それはそれの他のタイプに加えて
天使（Angel）である。
エンチャントされているクリーチャーが死亡したとき、天使の運命
をオーナーの手札に戻す。

使ったものはコレぐらいですね

ミサカクローンが天使化したのは……アレの御陰です

第四

「はい、今日の巡回はこれでおしまい。何か気になったこととか質問とかある？」

本日の巡回を終え、小型情報端末PDAに情報を打ち込んでいる眼鏡の女子高校生がいた。

その後ろには、つまらなそうな表情をしているそうになっている少女
『白井黒子』が遠慮がちに聞く。

「……少しお聞きしたいのですが……」

「なに？」

「ジャッジメント風紀委員になって一年にもなりますのに、何故わたくしに任せられるのは裏方の雑用や先輩の同伴のパトロールばかりなんですか？」

何も雑用が悪いとは思っていない黒子ではあるが、それで、どうしても先輩のように一人で任せてくれないのかなんとなく分かってはいたが、それでも聞いたのは、気の迷いだっただのかもしれない。

「あら、事件を未然に防ぐのは起こった事件を解決するより大切な事よ」

事件を未然に防ぐことは、リスクの軽減にもつながる。誰も好き好んでリスクを背負い込みたいとは思わないだろう。しかし、黒子はジャッジメント風紀委員に憧れを抱いていたのも事実である。

しかし、理想とは少しかけ離れていた。

学園都市の治安を守る風紀委員ジャッジメントを間近に見て黒子は少し現実を思い知らされ、また一つ大人の階段を上ったのである。

「それは分かっていますが……」

「座学・実技・能力測定全てにおいて成績優秀な自分が、半人前扱いされるのが不満なのね？」

一年以上も風紀委員ジャッジメントに所属している黒子であるが、任される仕事が雑用、先輩の同伴などなど一年間振り返ってみても、やっていることがこつとも同じだと自分は信用されていないのではと考えてしまう。

「そ、そういう訳ではありませんが……」

自分の弟を思い出してみる黒子。

白井遠夜との出会いは今から2年前だった。

学園都市では学園都市における社会現象の一つ。

原則、入学した生徒が都市内に住居を持つ事となる学園都市の制度を利用し、入学費のみ払って子供を寮に入れ、その後に行方を眩ます行為。その名も『置き去り（チャイルドエラー）』

黒子もその親も、当初は深刻に考えなかったが、とある出会いにより、置き去り（チャイルドエラー）の非常な扱いを知る。

それは偶然だった。その日は土砂降りになるほどの豪雨であり、学

校帰りの黒子は傘を差していたのにも関わらずびしょ濡れになっていた。

樹形図の設計者の予報により、今日は晴れと予想されていたものの何故か今日は雨だった。

それも豪雨である。

樹形図の設計者の天気予報は、もはや予知と行っていいほど念密に計算されたものであり、特別完全な異常気象などでもない限り外れることはない。

その日、天気予報のアナウンサーはもの凄く慌てていた。慌てに慌て、緊張のせいか裏声になるものもいたそうだ。

幸い黒子は学校に置き傘をしているので傘を差して帰ろうと思い、両親には連絡を取らなかつた。黒子はあまり両親を困らせることはしたくなかつたし、これぐらいなら、と学校から外に出た。

黒子は自分に厳しかった。小学生にも関わらずこの頃からジャッジメント風紀委員を目指そうと努力し始めた。

座学・実技・能力測定どれも学校ではトップクラスまで上り詰め、一部妬みのような視線を向けられたが、そんなことをどうでも良かった。

だから、あまり他人に頼るといったことはしない。

迷惑を掛けたくない。

それは親にも同じことが言えた。

むしろ親だからこそ迷惑を掛けたくなかった。

一刻も早く自宅に帰りシャワーを浴びたいと急ぎ足で進んで行く。

途中、奇妙な物が視界に入った。

途中といっても目の前はもうすぐ自宅で、数歩歩けば玄関にたどり着ける距離である。

なんか、黒ずさんでいる布キレ的な物があった。

それは、とても清潔とはいえない物で、普通の人ならすぐに立ち去ったであろう。

しかし、残念ながらその物体は白井家の近くに放置されたものであり、黒子はどうか別の場所に撤去できないものかと考えたが、それは晴れてからにしようと考え、一度自宅に帰宅しようとした。

ゴソゴソ……。

物音が聞こえたのでそちらのほうを振り返ってみると、布キレが某ドラクエのスライムの如く動いていた。

中に猫でも入って、中にとじこめられちゃったのではないかと黒子は考えた。

少し好奇心もあり、黒子は布キレに近づいた。

ピーン！

布キレの間から何か髪の毛らしきものを見た。

ヒョロ……。

次は首が布から飛び出し、黒子を見つめる。

黒子はこの状況に啞然となったが、相手が自分よりも年下の人であると知って。しばし硬直二人は見つめあつた。

現在、猛烈に雨の影響を受けている黒子だが、その子から目が離せなかった。

「あ、どうもこんにちは」

その子はもの凄く良い笑顔で黒子に挨拶した。

この子は、今の自分の置かれた状況を理解していないのかどうかは分からないが、どこか抜けているのか、能天気なのかなんとも不思議な子だった。

「こんな所になになさってるのですか……？」

「ん〜。秘密」

「何故そのような姿をなされているのですか……？」

「ん？ 全裸の方がよかったですか？」

「いえ、そういう意味ではないのですが……」

黒子は言葉では平常心を保っているように見えたが、内心焦っていた。

いかにも、親に捨てられたか、家出してきたか、どちらにしろ、どうみても児童虐待にした見えない子が目の前に居る。

警察に連絡したほうがいいと黒子は考えたが、その考えを見透かされたのか、その子は言った。

「ぼくつて置き去り（チャイルドエラー） なんだって、だから……
…警察なんかを呼ばれると、とても困ります」

自分の状況を理解していながら、笑って済ますその子をみて黒子は知った。置き去り（チャイルドエラー）なんか都市伝説かなにかと思っていたけどそれは違った。

目の前の子を見てよく分かった。

「貴方はこれからどうなさるんですの……？」

「がんばる」

何をがんばるか分からないが、こんな子はすぐに餓死して死ぬか、また研究所に連れて行かれるか、この子がまともに生きていけるとは思えなかった。

「でしたら……わたくしの家族になりませんか……？」

「え……?」

「きつとわたくしの両親を説得すればどうにかありますの!」

この頃の黒子は知らなかった。一般人が置き去り(チャイルドエラ
ー)を保護するというのがどういうことか……。

「でも、ぼく置き去り(チャイルドエラー)だよ?」

「だからなんですの! 将来は風紀委員ジャッジメントの白井黒子を侮るんじゃない
りませんの!」

「本当にいいの……?」

「あ……あ! もうこっち来なさい!」

そう黒子は言うと、無理やりその子の手を掴み家まで連行した。

「暖かいよ…… 凄く暖かい……」

ポロポロと涙が溢れ始めた。

人の優しさに触れられて、人の温もりを知って……。

0歳から異常なまでの知識の蓄積を確認。

知識を照らし合わせた所この『世界』とはまったく異なるナニ

だから、僕は研究場から逃げてきた。

でも、今は違う……。

「ふう……寒い！このままでは私達風邪を引くしまいりますの。っ
というところで一緒にお風呂にはいますの！」

黒子姉ちゃんありがとう

「着替えはわたくしので我慢していただきますの！」

貴方のおかげで

「しばしお待ちを。お湯を沸かしてくるので」

僕の中に暖かい『灯り』が付きました

「黒子お姉ちゃん大好き!!」

だから貴方はこの僕が命に代えても守って見せます

「///なんですの突然!!」

「えへへへ」

それが例え世界を敵に回したとしても

「貴方、男でしたの!!!」

やっぱり、自分の弟にはカッコイイ所を見せたいからなのです／＼／

第四（後書き）

『灯り』
フレイムズウォーカー
《次元歩行》 になるための最低条件。

小ネタ2 (前書き)

某SS的なノリで書いてみました。
かなり分かりづらかったらすみません。

小ネタ2

とある日常……。

その日、遠夜は散歩がてら外に外出していた。

「君だれ？」

「君だれ？」

「？」

「？」

「私の名前はインデックスっていうんだよ」

「ぼくの名前は白井遠夜つていいます」

「……………」

「とおやは学生さんなの？」

「小学生です。インデックスさんは教会のシスターさんなんですか？」

「うん。イギリス清教の『絶対悪』メセサリウス所属のシスターなんだよ！」

「おお〜〜！ 本物のシスターさんを見るの初めてです。握手して良いですか？」

「なんで?」

「なんででしょ?」

「……………」

「私は貴方のこともっと知りたいかな。だから、もっとお話ししよ」

「うん!」

「とおやは学生さんって言ったけど、とーまみたいに超能力あるのかな?」

「とーまって誰?」

「同居人なんだよ」

「そうなんだ。その人ってどんな超能力持ってるの?」

「とうまが言うには『神の奇跡すら打ち消せる能力（キリッ）』
だって」

「それって凄いね」

「そうだね。で、とおやはなにか超能力って持ってるの?」

「ぼくは、こんな事が出来るよ《極楽鳥》」

ポン!

「うわぁ！ 凄い！ なにか見たことな……くもない気がするよ」

「可笑しいな……この鳥はこの世界には存在しないから見たことない筈なのに」

「とおやって何したの……？」

「多元宇宙に存在する生物を喚んだだけだよ？」

「超能力ってそんなことも出来るんだね……魔術でもそんなこと出来ないよ」

「ぼく以外には出来ないと思うよ。なんたってぼくは学園都市最強のレベル5の第一位だもん！」

「それって凄いの？」

「毎月数億単位のお金が貰えるぐらい凄いよ」

「それは凄いかも！」

「凄いんです！」

「ねえねえ、とーやって他に何か出来ることってないのかな？」

「空を飛べるよ！」

「うわぁ……！」

「時間を止められるよ!」

「……………うわぁ!」

「死者蘇生出来るよ!」

「……………とーやって凄いんだね」

「えへへへ! インデックスさんは何か特技とかないの?」

「暗記が得意かな」

「おお〜凄い! ぼくって忘れっぽいからそういつのに憧れちゃっ
んだよ!」

ぐう〜!

「お腹減った……………」

「そろそろお昼だもんね……………。どこかファミレスにでも寄ってく?」

「うづん。今日はもう帰るよ」

「そうなんだ……………じゃバイバイ」

「とーや! またね!」

「あ、ダクえモンだ！」

「人前でその名前を呼ぶな！ 俺の名前は垣根提督かきねていとくって何回言わせれば気が済むんだ！」（『ゾンビ化』の被験者）

「どうも、こんにちは」

「ああ……。第一位はこんな所でなにやってる？ 散歩か？」

「今日はなんとなく、お散歩日和だったのです！」

「ああ、そうかい……。じゃあな」

テクテク……。

テクテク……。

ピタ……。

ピタ……。

「ついて来るなよ第一位……」

「拒むなよ第三位……」

「確かにテメエには借りはあるがな、ストーカー紛いのことまで許した覚えはない」

「ブーブー!!」

「やめる……まずその手を離せ」

「（『蛇変化』スタンバイ中）

「ああ……もう何も言わねえよ。ついて来るなり好きにすればいい」

「わあ〜い」

「つつたく……」

「テクテク……」

「テクテク……」

「ピッピッ……」

「（あれ？　なんか足音増えてないか？）」

「テクテク……」

「テクテク……」

「ピッピッ……」

「（気のせいじゃなかった。確実にもう一つ後ろからついて来てやがる！）」

テクテク……。

テクテク……。

ピトピト……。

「！！！」

クルッと後ろを振り返る垣根提督。

「?!！」

垣根提督に続いてクルッと後ろを振り返る白井遠夜。

「なう〜」

「なんだ猫か……」

「あらら……垣根さんに見つかっちゃったね」
『ステップのオオヤマ
ネコ』

「なう〜」

「え？ この猫お前の飼い猫か？」

「うん。そつだよ」

「無害だよな？」

「うん。ま（・）だ（・）無害だよ」

「なう〜！」

「ま（・）だ（・）ってなんだま（・）だ（・）って!？ この猫
今すぐ戻せ！」

「なう〜……………」

「え〜！ こんな可愛いのに……………。よっこしよ」

「なう〜」

「この愛嬌ある顔を見ても、まだ垣根さんは危ないと思うの!？」

「たしかに可愛いな……………」

ツンツン。

「なう〜〜」

「あ、駄目だよそんなに突っいちゃ可哀相だよ！」

ササツ……………。

「そんな怒るなよ……………」

「ふん！」

「めんどくせ……」

「あ、クレープ屋さんだ！」

「（このうちにトンスラするかね……）」

「おじさんクレープ二つください！」

「坊やお金はあるのかい？」

「もちろんです」

「はいよ」

「お会計はこれをお願いします！」

「……ブラックカード……！」

「垣根さん！！ あれ……？ いない……。クレープもう一つど
うしょ……」

「なう……」

「そうだね二人で仲良く食べよ……」

「やはり心配だから、仕方なく木の影から見守っているが、あのガ
キの落ち込んだ様子は見ちゃいらねえ……」木の影に隠れきって
いないのか、かなり目立っている垣根提督。

「あ！ 遠夜発見ってミサカはミサカは大はしゃぎ！」

「あ、打ち止めちゃん！ こんにちは！」

「こんにちは。ってミサカはミサカは遠夜に挨拶してみる」

「クレープ食べる？」

「うわぁ〜い。とミサカはミサカはクレープを二つ持っている遠夜に疑問を持ちつつ、有り難くクレープを頂くよ」

「なう〜」

「猫だ！ ってミサカはミサカはいつもは近付いただけで、離れていってしまう猫を間近に見られて、とても嬉しかったり」

「打ち止めちゃんがそんな喜んでくれるなら、この子もとてもうれしいと思うよ」

「おお〜！！ 初めて猫を抱き抱えられたよ！！ってミサカはミサカは初めての体験に興奮してみたり」

「なごむな……」

「なごむわね……」

「！！！？？」

ダッ！！

ガシッ!!

「ほんと可愛いわね貴方……うふふ」

シユッ!

「あれ?遠夜は?ってミサカはミサカはミサカは周りを見渡してみたり」

「なう」

ピトピト……。

「猫ちゃん!ってミサカはミサカは猫の後をついて行くよ」

「おいおい!! マジですか! なんかシヨタコンぱい変態に第一位が連れてかれちまったぞ!」

バサッ!!

「第一位には色々と借りがあるから……面倒臭いが探すしかねえか……」

キヤー!!!!

!!!!!!

「なんださっきの断末魔は……それに変な叫びも聞こえた」

シュツ！

「ふう…まさに九死に一生だったわ。あの子がまさか第一位とは思わなかったわ……私が『座標移動』じゃなかったら間違いないかそこで死んでたわ。それにしても、あんなシヨタが第一位なんて学園都市も捨てたもんじゃないわね……フフフフツ……」

ピッ！

「あ、もしもしアンチスキルですか？ 今日の前に不審人物がいるんですけど」

シュツ！

「あ、ほんと能力が『座標移動』で良かったわ」

「デストロイ!!」

バキツ!!

「なに、人の携帯電話奪ったうえにぶっ壊してんだデメエ……」

「あら、ごめんなさい反射的に壊してしまったわ。後で弁償するか許して」

「ああ、なるほど……よほど愉快的な死体になりたいようだなテムエ」
「ああ……なんか嫌な予感。そうと決まったら逃げるが勝ちだった
んでしょうけど……」

「あ？ 気づきやがったのかテムエ。今この空間は異物が混ざった
空間。座標なんて概念すら曖昧だ。出来るもんならやってみるよ」
座標移動』」

「なるほどね……。こんな反則的な能力に、その全身から漂うエセ
ホスト臭。貴方第三位の『未元物質』^{タクマター}ね」

「……ここまでムカついたのはあのクソ野郎以来だ。今日は気分が
良い……崩して、潰して、こねて精肉工場まで案内してやるよクソ
アマー！」

「……………（どうしよう!!？ 命からがら逃げてきたばっかなの
に、こんなのってついてないわ）」

「最後に言い残すことはあるかシヨタコン」

「土下座するから見逃して」

「だぐめ」

「キモ！」

「木っ端みじんに吹き飛ばやこのクソアマー!!」

「（せめてシヨタに抱かれて死にたかったわ……………）」

「ガーン!!」

「クククツ……良かったじゃねえかクソアマ。ある意味希少だぜ、第一位にここまで嫌われるのはな」

「私のどこが悪いのよ!？」

「変態」

「息遣いに犯罪の臭いがする」

「シヨタコン」

「視線がいやらしい」

「サラシ」

「無駄に能力の応用が効いて怖い」

「うん、もう駄目だな。一度スキルアウトに捕まって更正してもらえ」

「嫌に決まってるでしょ!!」

「ぼくも影ながら応援するから! ねえ?」

「グハツ……!! ……貴方とならどこでも天国な気がしてきたわ」

「おい、第一位を巻き込むな」

「分かった、分かってる、分かりました!! だから私を囲んでる羽を早く消して!」

「また展開するのが面倒くせえから却下」

「なんでよ!?!」

「再発防止だ」

「謝ってるのに疑われてる!!!」

「疑われるようなことをするテメエが悪い」

「泣いちゃうわよ私……」

「第一位念のために確認しておけ」

「うん、あまり好きじゃないけど了解! 《のぞき見》」

「クンカ!クンカ! スハースハーしたい!」

「生肌をペロペロしたい!」

「小学生よね? じゃまだ下の毛とか生えてないのかしら?……ハアハア!!!」

「お姉ちゃん!お姉ちゃん!お姉ちゃん お姉ちゃん……お姉ちゃん? (以下エンドレス)」

『……パンツだけを座標移動……出来るかしら』

『臭う臭う臭うわ!! 男の子の豊潤香りが!! 頬っぺたプニプニ。お肌すべすべ ハアハア……食べちゃいたいです』

ザザザザツ!!!!

「この人、よこしまな考えばっかで怖いよ」

「え?! なになになに何したの!? まさか! 私の思考を読んだのかしら。なら分かるわよね私の愛が!!」

「ふえ〜!」

「そういう欲求は、少年院にでも行って晴らして来い」

「あそこってあまり可愛い子いないのよね……」

「もう既に確認済みだったか、さすがシヨタコン」

「シヨタコンとペドフィリアは犯罪です!」

ピシッ!!

「あれ? アレ?! ロリコンは犯罪じゃないの!?!」

「ロリコンはカツコイイ人も居るので論外です!」

「なにその差別!?!」

「……ああ、突っ込むところがあるとすれば、別にシヨタコンは犯罪ではないことと、別にカツコイイ奴が居たところでロリコン正当化されることはない。まあ、変態には違いないがな……」

「じゃ、私もカツコイイところを貴方にみせれば……」

「もう遅いと思うがな」

「ちくしょう！　ちくしょう！」

「大丈夫だよお姉さん、きつとお姉さんを好いてくれる子もきつといるよ！」

「そうよね、そうだわ！　きつと居るわよね舌足らずでおねえちゃんって呼んでくれるシヨタ子が！　でも……ねえお願い、一度でもいいから『あわきんおねえちゃん』って呼んでもらえないかしら？」

「うーん。もし、ぼくが言ったらもう二度とぼくに変なことしないで誓える？」

「……うん」

「（絶対嘘だ！）」

「あ、空になにか綺麗な鳥が飛んでるわね」

「なに話題逸らそうとしてるのコイツ。ん？」

「あ……」

「なんだアレ？ 新種の鳥か？」

「さあ？」

パツ……。

「あ、なんか突然消えたわね」

「ああ……なるほど」

「ごめんなさい……」

「ん？ なんで謝るの？」

「コイツの能力とだけ言っておく」

「そう言えば気になってたんだけど、この子の能力ってなに？」

「ブレインズウォーカー
《次元歩行》」

「そういえば子のこの詳細データ見たけど、大して分からなかったわ。それってそういう意味？」

「テメエの考えとはちげーとから安心しろ。ただ単に第一位の能力がクソ野郎共にとって意味不明なだけだろう」

「ほんとにそれだけかしら？」

「知らないほうがいいと思うぞ？ 第一位の能力は、俺たちの頭なんかで想像出来る範疇はんちゆうを軽く超えてるからな」

「ごめんね……あまり言えないんだけど、ぼくの能力は空間能力の亜種（？）みたいなものなんだよ」

「????? それでさっきの鳥と何か関係あるのかしら？」

「ブレインズウォーカー《次元歩行》この意味そのまんまってことだ。後は教えねえ」

「え？ そんなにヤバイ能力なの？」

「本気なんか出されたら俺なんか秒殺されんぞ」

「それは笑えないわね……」

「ん？ もうこんな時間なんだ。帰らないと黒子お姉ちゃんに怒られる」

「え、もう帰るの？ せめて私のこと『あわきんおんねえちゃん』って言うてからにしてー！」

「後3分もないよお」

「……私のこと『あわきんおんねえちゃん』って言うてあげたら私の『座標移動』で……」

「垣根さーん……じゃあね」

「気をつけて帰れよ」

「《時間のねじれ》 or 《刃の翼》」

そして、遠夜は無事時間内に寮に帰れたようだ。

「ねえねえ！！ この猫ちゃん飼っちゃだめ？ってミサカはミサカは涙目になりながら説得するよ！」

「なう〜」

「ああ？ ガキの電磁波を嫌わねエ奴もいんだなア。珍しい猫じゃねエか」

「私は構わないわよ、黄泉川は？」

「よみかわ〜〜！」

「そんな泣きそうな顔で言われたら、無理とはいえないじゃん」

「うあーい！！ ありがとう黄泉川！」

「なう〜」

完璧に忘れ去られている『ステップのオオヤマネ』であった。

小ネタ2 (後書き)

Birds of Paradise / 極楽鳥 (緑)

クリーチャー? 鳥 (Bird)

飛行

(T) : あなたのマナ・プールに、好きな色のマナ1点を加える。

0 / 1

Zombify / ゾンビ化 (3) (黒)

ソーサリー

あなたの墓地にあるクリーチャー・カード1枚を対象とし、それを戦場に戻す。

Snakeform / 蛇変化 (2) (緑/青)
インスタント

クリーチャー1体を対象とする。それはターン終了時まですべての能力を失うとともに、緑の1/1の蛇 (Snake) になる。
カードを1枚引く。

Steppe Lynx / ステップのオオヤマネコ (白)
クリーチャー? 猫 (Cat)

上陸 土地が1つあなたのコントロール下で場に出るたび、ステップのオオヤマネコはターン終了時まで+2/+2の修整を受ける。

0 / 1

Peek / のぞき見 (青)
インスタント

プレイヤー1人を対象とする。そのプレイヤーの手札を見る。カードを1枚引く。

Time Warp / 時間のねじれ (3) (青) (青)
ソーサリー

プレイヤー1人を対象とする。そのプレイヤーはこのターンに続いて追加の1ターンを行う。

Bladed Pinnions / 刃の翼 (2)

アーティファクト? 装備品 (Equipment)

装備しているクリーチャーは飛行と先制攻撃を持つ。

装備 (2)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4740u/>

禁書にMTGが混ざりました。

2011年8月10日20時58分発行